

特別支援教育実践マニュアル

<No.2>

特別支援教育実践マニュアル<No.2>を配布します。<No.1>に引き続き、園生活の様々な場面で見られる子どもの「気がかりな行動」(子どもにとっての困り感)、その行動の背景の理解に基づくサポートのマニュアルです。

特別支援教育の具体的な目標は個別指導計画の作成にあります。

このマニュアルの「困り感」の視点を出発点として子どものニーズをとらえ、どんな支援をしていったらよいかを考えるときの参考として活用していただけると幸いです。

「困り感」へのサポート

- 事例4 黒板の文字を書き写すのに時間がかかってしまう
- 事例5 授業中に立ち歩いたり教室から出て行ったりしてしまう
- 事例6 先生が話をしてもいつもボーッとされて言われたことが分からない
- 事例7 注意されるとすぐカッとなり暴力が出てしまう

「困り感」からの子ども理解

これまで児童生徒の示す「気がかりな行動」を「困った行動」、いわゆる「問題行動」として捉える傾向はなかったでしょうか。

特別支援教育においては、困っているのは本人自身であるという観点から、その子が抱く「困り感」をしっかりと受け止め、その理解にもとづいたサポートの方法を提案します。

*「困り感」といっても、本人が困ったと思っているとは限りません。むしろ自覚のないままに、気がつくともうそういう行動をとってしまうことも多いのです。

「困り感」へのサポートの実際

事例4 黒板の文字を書き写すのに時間がかかってしまう

Dさんは、字を読むことはできるのですが書くことがうまくいかず、黒板の文字をノートに写すのにひどく時間がかかってしまいます。特に漢字はどうしても覚えにくいようで、練習しても成果があがりません。作文も苦手でやっと思いた文章はほとんどひらがなだったりします。時には自分の苗字を間違えることもあります。これまではくり返し練習をしていたのですが、最近は漢字練習に取り組む意欲もなくなってきたようです。

Dさんの困り感は何？

Dさんは空間の認知が弱く、物の形を捉えることがうまくできません。それに記憶もうまく働かず書きたい漢字を思い出そうとしてもなかなか想起できないのです。したがってDさんにとって文字を書くということは、大変な労力と困難が伴うことだったのです。いくら練習しても覚えられず困っていたのです。最近は皆が簡単にできるのになぜ自分はできないのかと、自己嫌悪とともに取り組む気力もなくなってきました。



サポートの方法

●覚えやすい工夫をする

絵文字辞典で絵と文字を関連づける、文字の特徴を言語化する、へんとつくりをグループにして覚えるなど覚えやすいように工夫します。

●書きやすい工夫をする

黒板とノートと視線を変えるうちに混乱するようであれば机に手本を置くようにします。見やすい大きさの文字にできるように、大きいサイズのノートを用意します。

●電子辞書をつかう

クラスで一人電子辞書を使うことに、ひけめや恥ずかしさを持たせないようにします。視力を補うのにメガネを使うのが普通のことのように、誰もがそれぞれの弱点をサポートしてもらって当然なのだというクラスの雰囲気が大切です。

事例5 授業中に立ち歩いたり教室から出て行ったりしてしまう

E君は、授業中皆が着席しているときに席を離れて歩き回ったり、突然教室から出て行ったりしてしまうこともあります。一学期の校外学習では、一人で集団から離れてしまい迷子になってしまうということがありました。休み時間には関心のあるものを見つけると、友達のもので勝手にいじってしまい、よくトラブルが生じます。

E君の困り感は何？

E君は好奇心旺盛で興味を持ったらもう体が動いてしまいます。それまでやっていたことはそっこのけになってしまい、その場のルールや約束事は関係なく、やりたいことを始めてしまうのです。「～をやりたい」と思うとすぐ行動化してしまう「衝動」のコントロールができないことに困っているのです。

サポートの方法

● タイミングよく適切な声かけを

その場に合った正しい行動が取れるように「ここを見て」「～さんの本だね」「貸してって言おうね」「偉いね」相手の目線で、短く、笑顔で声をかけてあげましょう。行動の前（予想される）、最中、直後とタイミングよく声かけします

● ほめることを基本に

やめさせる、指示する、注意する、叱る、というかわりになりがちです。意識的に正しい行動ができたときはもとより、この子なりの尺度で些細なことでも、少しでも衝動をコントロールする姿勢が見えたときなど、ほめることを指導の基本にしましょう。

● 共通理解の下で協力して

事前把握できない突発的な行動には、そばにいるどの先生でも同じ対応ができるよう「困り感」の共通理解を図っておきます。

6 先生が話をしてもいつもボーッとしてみわれないことが分からない

Fさんは、休み時間には特に問題なく友達とおしゃべりできるのですが、一斉授業などで先生がクラスの皆に話したことがよく分かりません。一対一で説明すると理解できるのですが集団の中に入ると指示が分からなかったり、一人ボーッとしてみたりすることがしばしば見られます。

● Fさんの困り感とは？

Fさんは集団の中に入ると状況がよくつかめず、何に注目したらいいのか分からないのかもしれないかもしれません。先生の話も途中で気が散って、指示が分からなくなってしまうのです。また言葉だけだと情報がうまく処理できず、意味を聞き取ることができないのです。

話の意味がつかめず状況判断ができなくて困っているのです。



サポートの方法

● 注意を引いてあげる

今はどこに集中したらよいか分かるようにしてあげます。目を合わせて指示したり、名前を呼んだり合図しながら話をしてあげましょう。指示は短く、具体的にはつきり示すことも大切です。

● 指示を視覚化する

言葉の指示をできるだけ視覚化してあげましょう。言葉だけでなくカードや黒板に絵や図で示して、理解しやすくします。一度に多くの指示を出さないようにしましょう。

● ほめること

指示通りにできたときにはきちんとほめてあげましょう。できて当然ではなく、できたことを伝えほめることで自信を持てるようにしてあげます。

G君は、いつもイライラしているようで些細なことですぐ大声を上げ、イスを蹴ったり、物を投げたり、友達をぶつなど乱暴な行動が目立ちます。自分から勝手な行動をして友達とトラブルとなることも頻繁です。その勝手な行動など、自分について少しでも否定的なことを周囲に指摘されると、ひどく興奮してさらに暴力が出てしまいます。先生がトラブルのわけを聞くと、いつもすべて相手が悪いと責任を転嫁します。

G君の困り感とは？

G君は小さいときから多動で衝動的な行動が多く、本当は友達と仲良くしたいのですが、トラブルが絶えませんでした。したがって親や先生から注意されたり叱られることが多かったのです。F君は衝動をコントロールできずに「困っていた」のです、しかし、そのことは分かってもらえず叱られるばかりなので、満たされない思いを溜め込んでしまってきたのです。その結果自分について少しでも否定的なニュアンスを含んだ言葉が耳に入るとカッとなってしまい、さらに暴力になってしまう悪循環ができてしまっていたのです。自分を否定されると怒りが先行してしまい、やり返すことで頭がいっぱいになり、相手が悪いという発想しか浮かんでこないのです。自分の行動を客観的に反省することができなくて困っているのです。



サポートの方法

●頭ごなしに叱らない

頭ごなしに叱るのではなく行動の背景にある「困り感」に共感しながら、しかも毅然とした態度で危険な行動や友達を傷つける行動は許されないことを教えましょう。自分の気持ちや感情をどう表現したら相手に伝わるか一緒に考えてあげます。

●興奮が静まるまで待つ

ひどい興奮状態のときは場所を変えるなどして、気持ちが静まるまで待ってあげましょう。落ち着いたところでトラブルの原因を一緒に話し合い、本人の気持ちや感情に共感しながら「どうしたらよかったのか」考えさせます。周囲とのかかわり方や、どのようにことばかけをしたらよいのか具体的に教えてあげましょう。

●ほめることで好循環へ

周囲から注意されたり叱られたりすることが多いので「自分はダメな人間なんだ」と自己評価を低くしがちです。そのことから、すねたり周囲を困らせたりする行動をとり、更に否定されるという悪循環に陥ってしまうのです。意識的に褒めることを多くして、自分も「できた」「OKなんだ」という自己肯定感を育てましょう。望ましい行動が自発的に出てくるような好循環をつくってあげることです。



まなびサポート事業

特別な教育的支援を必要とする子どもの学習環境を整え、より豊かな学校生活を実現できるよう支援していきます。

教育研究センター

381-7960・381-7961

まなびサポート相談室〈見明川中学校内〉

390-5204